

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月30日現在

機関番号：17501

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22530709

研究課題名（和文） 教師の勇気づけ実践が児童の学級適応及び学級集団過程に及ぼす影響

研究課題名（英文） The effects of teachers' encouragement on students' classroom adjustment and group processes

研究代表者

古城 和敬 (KOJO KAZUNORI)

大分大学・教育福祉科学部・教授

研究者番号：00145351

研究成果の概要（和文）：本研究は、教師の勇気づけ実践が児童の学級適応及び学級集団過程に及ぼす影響を実験的に検討することを目的とした。事前に教師に勇気づけ訓練を行い、その後各自の学級で勇気づけを実践するよう求めた。学級適応等の測度は、実践前、実践中(1ヶ月経過時)、及び実践後に測定した。その結果、学級適応の一部の測度で、勇気づけ実践が児童の学級適応に肯定的な影響を及ぼすことが認められた。また、実践学級の抽出児を追跡した質的分析でも肯定的な変容が確認され、勇気づけ教育の学級指導への有効性が考察された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of the present study was to investigate the effects of teachers' encouragement on their students' classroom adjustment and group processes experimentally. A 2(experimental classes vs. controlled classes) × 3(measurement time: pre vs. a month later vs. post) factorial design was used. After learning of the encouragement theory and techniques, teachers were asked to practice the encouragement in their own classes for two months. The results suggested that teachers' encouragement had positive effects on students' adjustment partially. It was found that the encouragement was applicable to classroom management and student guidance in Japanese school education.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,100,000	630,000	2,730,000

研究分野：教育心理学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：勇気づけ、学級適応、教師期待の認知、学級経営、生徒指導、教師と児童の人間関係

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 児童・生徒の対教師関係や級友関係など日常レベルで生じる学級適応の問題の解決は、第一義的には、教師の学級経営や生徒指導の力量にかかっている。特に近年の教育動向や学習指導要領からは、基礎・基本の学力

とともに、『子どもの個性を生かす』視点が重要視され、個別の子どものよさを積極的に見だし、その可能性を伸ばすような具体的な教師行動として、励ましやサポートが重要であると読み取れる。この種の励まし行動は、最近子育ての分野で注目されている「勇気づ

け」の概念とほぼ同義である(古城,2006)。

(2)「勇気づけ」とは、親が子どもの長所や能力に注目し、賞賛に頼らずに子どもの自立心や責任感を育成していく理論と技法の総称である。その技法の一つ、「反響的聴き方」は、子どもからのコミュニケーションに共感的・受容的な態度で接し、彼らの感情や意思を整理してフィードバックする方法である(柳平,1982;古城,1999)。

(3)多様な個性・背景をもつ児童・生徒に向き合う教師の資質として、最近カウンセリングマインドの重要性が指摘されているが、勇気づけはまさにその要件を充たし、教育指導への効果が大きいと期待され、その実践の蓄積によって evidence-based の新しい教育指導理論の構築も図られると見込まれる。

以上の問題意識から、筆者は、教師の勇気づけの教育実践への適用可能性を実験的に検討する着想に至った。

## 2. 研究の目的

(1)上記の問題意識に基づいて、筆者(古城ら,1998;古城,2006 など)は、勇気づけの学級指導への適用可能性を探るため、一定の訓練を受けた複数の教師に勇気づけの実践を依頼し、それによる児童の学級適応及び学級集団過程の変容を検討した。その結果、教師の勇気づけが児童の学級雰囲気認知(学級適応の一指標)を肯定的に変化させることが部分的に認められた。

(2)しかし、これら先行研究では、教師に約20時間に及ぶ勇気づけのトレーニングを行い、その後一定の実践期間を要するため、単年度に収集できる標本数に限界があり、知見の一般化には至っていない。

(3)そこで本研究は、アクション・リサーチ的な考え方に基いて、より多くの学級を対象として、教師の勇気づけ実践が児童の学級適応及び学級集団過程に及ぼす影響を、統制学級との比較の下で実験的に検討することを目的とした。さらに、勇気づけ実践の効果に関する質的な検討を行うため、一定の基準で抽出した児童と、勇気づけを実践した教師に定期的な面接を行い、学級に対する態度構造や勇気づけ実践に対する態度構造の変容過程を詳細に記述・分析することとした。

## 3. 研究の方法

(1)研究参加者：大分県下の公立小学校2年、3年、4年の5学級の児童152名とそのうちの抽出児14名、及び実践学級の担任教師4名。

(2)実験計画：学級(実践学級 vs. 統制学級)×測定時期(事前 vs. 中間 vs. 事後)の2×3の要因計画。実践学級(4学級)では、担任教師が意図的・継続的に勇気づけ実践を行った。統制学級(1学級)では、そうした操作は一切行わ

なかった。第1要因のみ被験者間要因。

(3)従属変数(測度)：

①学級適応 SMT(学級適応診断検査、日本文化科学社刊)の中から「教師との関係」「学校・学級への関心」「級友関係」「学習意欲」を測定する項目、各5項目、計20項目(5段階評定)。これに加え、Q-U(またはHyper-QU)アンケートも実施した。

②学級雰囲気 根本(1983)に基づいて古城ら(1989)が因子分析により抽出した項目で構成されるSD法尺度(「秩序」因子と「快適」因子からなる。例：「いごちのよいーいごちのわるい」など。5段階評定)。

③教師期待の認知 古城ら(1991)の尺度を用いた(5段階評定)。

(4)手続き：

①教師の勇気づけの訓練；各年度の夏休みに、実践学級担任の教師を集め、「STEP 勇気づけ」(柳平,1982)のプログラムに基づいて、専門のインストラクター(有資格者)の指導のもとで9セッション計20時間(4日間)訓練し、勇気づけの基本的態度と実践技法を習得させた。

②2学期の初めに、上記の従属変数を組み込んだ質問紙を実践学級と統制学級の児童に配布し、回答を求めた。この回答に基づいて、実験学級においては、学級適応が低い児童、教師期待を低く認知する児童、あるいはQ-Uアンケートで学級生活満足度が低い児童を各学級で数名(計14名)抽出した。

③その直後から実践学級の教師に勇気づけを2ヶ月間継続的に実践するよう要請した。

④勇気づけ実践を開始した直後、実践学級の教師と抽出児に対して個別の面接を行った。抽出児には「学級に対する態度」と「教師に対する態度」について自由に回答を求めた。教師には「学級に対する態度」や「勇気づけ実践による自己の変化」について自由回答を求めた。

⑤実験補助者は定期的に学級を訪問し、その間の実践について教師の自己報告(誰にどのような内容の勇気づけを行ったか、など)を求め、勇気づけが継続的に行われていたかをチェックした。

⑥1ヶ月後に、②の質問紙を全児童に再度実施した。また、④と同様に、実践学級の抽出児と教師に面接を行った。教師には途中経過の内省も求めた。

⑦2ヶ月後の実践終了時に上記質問紙を全児童に実施し、④と同様に抽出児と教師に面接を行った。教師には最終的な内省も求めた。

⑧統制学級においては、②の手続き以降は、実践学級の⑥と⑦の時点で、実践学級と同一の質問紙を児童に実施し、回答を求めた。

## 4. 研究成果

(1)分析においては、まだ標本数が十分でない

ため従来のデータも加え、学級単位のデータと児童個人単位のデータについて、学級(実践学級 vs. 統制学級)×測定時期(実践前 vs. 実践中 vs. 実践後)の2×3の2要因分散分析をそれぞれ実施した(小学2年の2実践学級を除き、実践11学級、統制12学級の総計23学級で分析)。その結果、児童個人単位データの「教師期待の認知」測定において期待された交互作用が有意であった( $F=3.35$ ,  $df=2/1382$ ,  $p<.05$ )。下位検定を行うと、実践前と実践中の両学級間の評定値には差がないが、実践後においては実践学級の方が認知得点が高いことが認められた。学級単位のデータの「教師期待の認知」でも有意ではないが同様の傾向が見られた。他の測定においては期待された交互作用は有意でなかった。このことから、学級適応の一部の測定において勇気づけ実践の効果が認められたといえる。(2)これに加えて、本研究では、実践学級の抽出児の「学級および教師に対するイメージ」の変容過程と、担任教師の「勇気づけに対するイメージ」の変容過程をPAC分析によって質的に検討した。

①14名の抽出児のほとんどが学級や教師に対する態度において肯定的な変容を示した。以下は、教師の面接記録を交えて2名(4年生)の抽出児について記述する。教師期待認知得点が低いA児(女子)は、実践前の面接では学級に対して「気をつかう」などの否定的イメージを挙げたが、実践後の面接では「楽しい」肯定的なイメージが始めに挙げた。教師は実践が始まってしばらくすると、勉強や生活のことについて教師のそばに来て話をすることがあったことを報告した。これは実践前には見られなかった行動である。そのときにも教師は、「自主学习がよくできているね」や「そのやり方もいいね」など、勇気づけることに努めたと述べていた。教師がA児に勇気づけを実践することで、A児の学級の捉え方やイメージが肯定的に変化したと推察される。

もう一人のB児(男子)は、事前の学級適応得点がかかなり低く、Q-Uアンケートにおいて学級生活不満足群に属していたが、抽出児の中で最も肯定的な変化が見られた。事前のPAC分析時は、「いいクラス」「楽しい」の2項目を挙げていたが、事後の分析時には、「やさしい」「わからないことを教えてくれる」「一緒に遊んでくれる」等の10項目を挙げた。事前より事後の方が「友達が~してくれる」という具体的な内容になっていた。この事例は勇気づけ実践によって級友関係にも肯定的な効果があったことを示唆している。②いずれも4年生担当のC教師とD教師の変容過程について以下に記述する。両教師とも、事前の段階で勇気づけの実践について不安を述べていた。その後C教師は、勇気づけ

の仕方を書いたミニテキストを持ち歩き、勇気づけを常に意識する姿勢が見られた。当初は、「勇気づけについて意識はしているが、自分に余裕がなかったりすると、ついつい怒ってしまう。勇気づけをするのはたいへん難しい」といった内省であったが、次第に「気になる児童は、特に意識して見るようになり、見ていればちょっとした変化に気づくようになり、気づいたことで認める声かけができるようになった」と変化していた。勇気づけの実践が、児童と教師両方の成長に影響を及ぼしていることが推察された。

D教師は実践を重ねるごとに、勇気づけの技法の一つである『自然な結末』を児童に考えさせるような様子が見られるようになった。また、「今の皆聞き方すばらしいね。すごく聞きやすかったよ。昨日よりも聞きやすくなっているよね。皆のおかげだね」などの「Iメッセージ」の技法を自然に取り入れるようになっていた。勇気づけ後の教師の感想として、「難しかった。しかし特にE児が2学期に比べて落ち着いてきたと思う。前は、注意してもしっかりと入っていないように思っていた。目を見て話しても「何を言われても聞かないよ」という感じがあった。しかし、最近ではふっと顔をそらすことがなくなった。かみ合うようになった気がする。お母さんとのつながりやE児とのつながりが深くなったように感じると述べた。

このように、教師の内省報告からも、勇気づけを実践したことで、児童が自分の責任において自分の行動を自分で選び、その結末が自分にとってプラスかマイナスか自覚するような自律的な行動の進歩が図られるようになったことが報告されている。教師は児童の自律的な行動の進歩を認識し、子どもの力を信じて待とうとする姿勢が増えたことや視野が広がったことを実感していた。

以上の成果を総合すると、勇気づけの教育実践への適用可能性はひじょうに高いと考えられる。しかし、研究成果の一般化には今後さらに標本数を確保して実証していく必要がある。

(3)本研究は、勇気づけ実践が児童の学級適応過程に肯定的な影響を及ぼすことを量と質の両面から検討しており、研究成果の説得力は極めて高いと考えられる。最近の教育心理学的研究を概観すると、この種の学級介入的な実践研究は少なく、その意味からも本研究の意義は大きいと考えられる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

① 古城和敬 2012 中学年のグループ活

動と指導のあり方 児童心理,66,18-23.  
<http://www.kanekoshobo.co.jp/np/inner/166081/>

〔学会発表〕(計4件)

- ① 古城和敬 2013 教育カウンセリングの生徒指導への貢献—一次的・二次的援助サービスの適正化とトータルな援助サービスに向けて—, 日本教育カウンセリング学会, 2013年8月10日(発表予定), 富山大学
- ② 古城和敬 2012 学校教育におけるさまざまな取り組みに関する整理の試み—コミュニティ心理学的概念整理と位置づけ—(シンポジウム司会) 日本教育カウンセリング学会, 2012年8月18日, 京都華頂大学
- ③ 古城和敬 2011 クラスにおける Q-U 結果の共有とその活用—STEP的アプローチ— 日本教育カウンセリング学会, 2011年8月10日, 北海商科大学
- ④ 古城和敬・笠置美子・中村祐介 2010 教師の勇気づけ実践が児童の学級適応過程に及ぼす影響(4)—学級単位のデータの分析を中心にして— 九州心理学会第71回大会, 2011年11月6日, 長崎大学

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

古城 和敬 (KOJO KAZUNORI)  
大分大学・教育福祉科学部・教授  
研究者番号：00145351

### (2)研究分担者

なし

### (3)連携研究者

なし